（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　松野（まつの）　彩（あや）

本論文は『うつほ物語』における①男性貴族の官職、②皇妃、③年中行事、④通過儀礼について、平安朝の実態との詳細な比較検討を行い、この作品の人物造型や物語展開の方法を解明するとともに、この物語の成立を一条朝にまで下らせる近年の議論に対し、旧来の定説どおり円融朝末年を下限とすべきことをも併せて論証したものである。論文の構成は、上記①～④に配当された 4 部 14 章から成る。

第Ⅰ部「男性貴族の官職」は『うつほ物語』に登場する男性貴族の官職就任・昇進状況を網羅的に調査した上で、「楼の上」下巻で仲忠が秘琴弾奏の褒賞として内大臣に任じられることを辞退する場面に、天禄三年に藤原兼通が内大臣に任じられた史実をふまえつつ、仲忠を摂関家的な権力者とは異なる理想的な文人政治家として造型しようとする作者の意図を看取する。また源実正が長く民部卿のままであることにつき、史上の民部卿の例を参照し、弟実忠の引き立て役に留まるその人物造型と不可分な設定であるとする。さらに源正頼が摂関家的な政治家として戯画化される一方で、その娘のあて宮が蔭ながら不遇な者に恩徳を施す后がねとして描かれていることを浮かび上がらせ、物語後半で彼女と仲忠との精神的な愛に支えられた政治的協働が展開してゆくことの伏線となっていることを指摘する。

第Ⅱ部「皇妃」では、「内侍のかみ」巻冒頭で朱雀帝や兼雅・正頼らの言葉を通して皇妃や人妻に対するかなわぬ恋においてこそ最も深い恋愛の情趣が表れるという考えが繰り返しのべられるのは、俊蔭の娘と朱雀院、あて宮と仲忠との精神的な愛という物語後半に展開される主題の序曲となっていることを明らかにし、同巻で節会の饗宴において女御が「賄い」(給仕)を勤めているのは、廷臣が皇妃を恋慕する契機を生み出すための、史上には例のない虚構であることを指摘し、「楼の上」上巻の朱雀院と俊蔭娘の贈答歌も、両人が精神的な愛を歌い交わしたものとする解釈を提示する。また「国譲」下巻の新帝による女御宣下に関して、同時期の女御は 3 人までという不文律があったことも明らかにしている。

第Ⅲ部「年中行事」・第Ⅳ部「通過儀礼」においては、それぞれの第 1 章で物語に見られる年中行事・通過儀礼のすべてを挙げてその描かれ方を検討した上で、後続の章では年中行事が物語展開の重要な契機として用いられていることや、服喪を通して登場人物の複雑な心情が描き出されていることなどを指摘している。

物語本文の解釈にはなお再考を要する点もなしとしないが、史料を丹念に参照しつつ物語の虚構の方法を精緻に解明した、新見に富む労作である。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。